

本年一月元旦の恒例の『人民日報』ほか共同社説「■結して一層大きな勝利をかちとろう」は、今日の世界の「大状況」を中国なりに解釈して情勢の有利さを誇らかに語っていたが、中国の国連参加が現実となった新しい年の年頭アピールとしては、意外に中身の薄いものであった。中国自身、いよいよニクソン訪中を迎える直前にありながら、こうした重大な「転換」と深刻な関係があったと思われる「林彪失脚」がもたらした政治的動揺を内にひそめているため

### ●外交時評

## 新しい世界と中国

中嶋領雄(東京外国語大学助教授)

であろうか。

それはともかく、米中接近、中国の国連参加、ドル防衛問題、それにバングラデシュをめぐる印パ紛争というように、七〇年代国際政治の流動方向を印象的に告げ知らせた一九七一年はすでに暮れていった。それでは新しい一九七二年の世界はどのような方向に展開するのであるか。一九七一年に生じた国際的な変動の多くが、いずれも予想を大きく上まわる変化であったのに対し、本年はニクソン大統領の訪中、同訪ソという大きな外交懸案がすでにタイム・テ

ーブルに織り込み済みであることに示されるように、七一年に生じた情勢変化の潮流に乗った、さらに具体的な展開を遂げるものと思われる。

そうした展望のなかで、今日の国際社会を見つめてみると、そこには、米・中・ソという、いわゆる大国の華麗な外交が鳴り物入りで展開され、そうした国際政治の力のぶつかりあいが様々な思惑や利害のなかで交錯していく一方、中東紛争、インドシナ戦争、南北朝鮮の問題、



そして、なによりも今回の東バキスタン独立のたたかいにみられるように、今日の世界には、大国間のパワー・ポリティクスでは問題をほとんど解決できないドロドロした現実があり、そこでは民族的・人種的・宗教的・イデオロギー的な対立が、依然として渦巻いている。国際政治が流動化し、いよいよ本格的な国際化時代がグローバルな規模で開幕し、国連は中国の参加によって、より制度化され、機構化されようとしているのに、このような問題が、あたかも現代文明への挑戦のようなかたちでわれわれのエモ

ーションを刺激しつつ起こっているのである。もとより、これらのすべての問題に関連して国際社会における「中国の影」は今後、さらに広まり深まっていくであろう。だが、そうした情勢は一方で、全世界が中国の門戸を開こうとする、いわゆる「自由化」の外圧ともなっており、そうした外圧がいま中国大陸にひたひたと押し寄せ

ているといえるのであつて、これに毛沢東中国がどう対処しようとするかが今後、文化大革命以上の文字通りの「世紀の実験」になつていくものと思われる。しかも、今日の中国では、「林彪失脚」にみられるように、九全大会路線の完全な変容と修正がすすみつつある。一九七二年は、われわれにとって、日中国交回復へのさらに一步の前進の年でなければならぬが、その際、このような中国の諸現実を冷静に見きわめていく努力もおこたつてはならないと思う。

## アジアの将来

新書判 三五〇円

R・ローウェンタール編  
山下正雄・小山皓一郎共訳

アジア地域に西欧的理性と経済的合理性を移植することの可否を国際政治・経済に造詣の深い五人の学者が解明する。

時事通信社